

# 「韓日祝福」で韓国に渡った日本人女性たちの 「その後」

武田里子（大阪経済法科大学  
アジア太平洋研究センター）

## はじめに

90年代に入り韓国は結婚移住研究の主要な調査地になった。移動を規定する社会構造と女性たちの意思決定や移動メカニズム、そして女性たちが展開しているミクロな権力関係や自己意識などへと研究関心は広がりを見せている。しかしながら、そのなかですっぽりと抜け落ちている一群の女性たちがいる。日本人女性たちだ。研究論文には日本人女性は統一教会（後注）による結婚が多いとの記述も見られるので、存在自体は認識されている。しかし「韓国に渡った統一教会女性信者達の生活ぶりや信仰のありようを伝える調査研究は皆無」（櫻井義秀・中西尋子『統一教会』北海道大学出版会）である。理由は反社会的集団とみなされる組織に対する調査自体の難しさのためであろう。統一教会の正式名称は2015年8月に「世界平和統一家庭連合」（旧「世界基督教統一神霊協会」）に変更されたが、本稿では一般的に使われている統一教会を使う。

韓国の国際結婚件数は1990年には5000件ほどであったが、ピーク時の2005年には43,000件に達した（全婚姻数の13.6%）。女性結婚移住者で婚姻期間5年以上の者の割合は10.7%である。この割合を上回っているのは米国（43.2%）と日本（38.6%）の2カ国のみ。その後、フィリピン（7.1%）、中国（7.0%）、ベトナム（1.4%）と続き、モンゴルとウズベキスタンはいずれも0%である（韓国統計庁「人口動態統計2006」）。また日本人女性の63.4%は宗教を介した結婚である（韓国女性家族部報告書2013）。統一教会では韓国人男性と日本人女性の教団内結婚を「韓日祝福」という。この経路で韓国に渡った日本人女性は約7000人いる（同上『統一教会』）。

筆者の関心は統一教会そのものではなく、7000人もの女性たちが複合的な社会的制約のもとで、どのような葛藤を経て、どのように周囲と交渉し、社会関係を組み替えながら生きているのかという点にある。いまでも韓日祝福で韓国に渡る女性たちの流れは続いている。その女性たちが困難に直面した時に、最も的確な助言ができるのは同じ課題を克服してきた女性たちであろう。本稿の目的は、不可視化されてきた女性たちの存在が内在化させている可能性を、女性たちの言葉に依拠しながら考察することである。そのための作業として、女性たちのライフコースから2つの出来事に着目する。ひとつは女性たちの入信動機と社会状況との関係、もうひとつはIMF通貨危機（1997年～2001年）である。

## 1. 分析データ

本稿で使用するデータは、2013年から2016年にかけて実施した江原道とソウル市及びその近郊に居住する日本人女性のインタビュー記録である。文中の表現では、2015年9月の江原道での調査を「江原道調査2015」、ソウル市とその近郊居住者の調査については、「ソウル調査2015」「ソウル調査2016」と表す。表1にインフォーマントの略歴と調査時期をまとめた。

年齢は40代から50代前半である。入信経路の「原研」という表記は大学で原理研究会に勧誘され入信したことを表し、「チャーチ」とは主に路上で声をかけられて入信したことを表している。教団内では原研とチャーチは別系統で組織され、伝道経路から教育システム、活動形態も全く異なる。「二世」は両親が教会員で結婚後に生まれた子どものこと。誕生後に親が入信した子どもは「信仰二世」と呼ばれる。Gによれば、原研では男性9割・女性1割であるのに対して、

表1 インフォーマントの略歴と調査時期

	学歴	結婚年	入信経路	現在の仕事	教団との関係:( )内は子ども
A	修士	1993	原研	大学教員	韓国留学 1988 年、結婚、脱会→キリスト教、修士、(大学 3 年、大学 1 年、高校 2 年)
B	高卒	1996	チャーチ	パート	脱会、(中学 1 年、小学 5 年)
C	高卒	1995	チャーチ	パート	信徒、(中学、高校 2 年)
D	高卒	1998	チャーチ	パート	脱会→新興宗教、(中学 3 年)
E*	大卒	1998	チャーチ	会社員	信徒、(中学 3 年、小学 3 年)
F*	専門学校	1996	チャーチ	会社員	信徒、05 年離婚、10 年再婚、(高校 3 年)
G	大卒	1992	原研	通訳翻訳	信徒、(高校 2 年、高校 1 年)
H	短大卒	1992	チャーチ	パート	信徒、(成人、高校 3 年、中学 2 年、小学 6 年)
I	修士	1995	二世	通訳翻訳	信徒、韓国留学 1986 年、(高校 3 年、小学 2 年)
J	大卒	1988	チャーチ	パート	信徒、(大学 1 年、中学 2 年)
K	短大卒	1992	チャーチ	パート	信徒、(高校 2 年、中学 2 年)
L	高卒	1992	チャーチ	日本語講師	信徒、(大学 2 年)

- 1) A・B・C・Dは2015年9月のグループインタビュー参加者。Bには別途個別インタビューも行なった。  
 2) G・H・I・J・K・Lは2015年9月のグループインタビュー参加者。  
 3) □で囲んだG・I・J・Lは2016年12月のグループインタビュー参加者。  
 4) Aには2013年9月、2014年1月、2015年9月に個別インタビュー。  
 5) Gには2015年9月、2016年2月、2016年12月に個別インタビュー。  
 6) Iには2016年2月に個別インタビュー。  
 7) EとFは2015年9月に個別インタビュー。

チャーチ系は女性9割・男性1割と構成員の性比が正反対になる。

原研出身者は「通教からホーム生活、献身、そして祝福へという一直線の信仰生活を求められる」ことはなく、「卒業後に就職して通教者になるか、統一教会を離れるか、統一教会の献身者として全国大学連合理究会の業務に就くか、様々な道が選択可能」であり、次世代における指導者層になることが求められている」(前出『統一教会』)。しかし、Gによれば、1987年以前は原研メンバーも入信後はホーム生活を経て献身するために大学を退学させられていたという。韓国の大学でも原理研究会が組織されており、Gの夫は原研出身である。

ソウル調査2016の4時間に及ぶインタビューはICレコーダーに記録し、文字化した内容を参加者全員から確認してもらい、論文等で引用する承諾を得た。

## 2. 統一教会との出会い

筆者が結婚移住者の調査で初めて韓国を訪れたのは2008年である。多文化家族支援センターなどで統一教会の日本人女性とすれ違うことも

あった。2015年9月に江原道とソウルで統一教会系の女性たちのグループインタビューが実施できたのはAのおかげである。Aとは2012年からメールで意見交換を始め、2013年9月にAの協力を得て、江原道でアジアからの結婚移住女性と多文化家族支援センターで聞き取り調査を行なった。2015年9月に再訪問した際に、Aから今は脱会しているが統一教会で来韓したこと、韓国の国際結婚調査をするなら統一教会の女性たちの話を聞く必要があると助言された。Aの話を聞いて2013年の調査で感じた違和感の正体は何であったのかが腑に落ちた。筆者自身も気にしつつ見て見ぬふりをしてきたのが統一教会の存在だった。

Aが暮らす地域にも30名ほどの日本人女性がいる。全員が統一教会経由で来韓した人たちである。脱会している人もいれば、休会している人、別の新興宗教に移った人など多様である。Aは脱会後も入管手続きなどで困っている日本人女性の手助けを続けている。この時にAからソウルに住むGを紹介された。

ソウル調査2015は統一教会の日本人女性がつネットワークを通じて参加者を募る形式をとった。このため参加者同士が直接の知り合いと

いうわけではなく、また信仰に対する姿勢にも微妙な温度差があることが分かった。インタビュー後にGから信仰や教会の組織問題などについては話せないことが多かったと聞き、2016年2月に改めてGとIから個別に話を聞いた。

### 3. 韓日祝福

統一教会の合同結婚式については筆者も誤解していたことがある。マッチングによって結びあわされた男女が合同結婚式を経てすぐに家庭生活に入るわけではない。

「恋愛結婚は墮落した結婚であり祝福こそ理想の結婚」だと考える統一教会員にとって、結婚は「地上天国の実現と罪の清算のための社会変革運動」という位置づけになる（前出『統一教会』）。合同結婚式のあとに40日間から3年ほどの「聖別期間」があり、その間は韓国もしくは日本で教会活動を続ける。さらに相対者（夫）の暮らす地域の教会に住み込んで教会の仕事を手伝う「任地生活」を送り、家庭出発の準備をする（同上）。

#### 3-1 信仰の揺らぎ

任地生活を共にした40人の中で原研出身はG一人であった。韓国語でコミュニケーションができたのもG一人だったため、自然に通訳や相談を引き受けるようになった。相対者に違和感をもったLが地区教会の牧師を交えて話し合う際にGは通訳として間に入った。同居する前に文通などを通じてある程度関係形成ができる仕組みにはなっているが、その内容は配属された地区教会によって差異がある。

Gは任地生活のなかで深刻な精神的葛藤を経験することになった。チャーチ系の女性たちは入信後に十分な教理や神学的教育を受けることなく、「マイクロ」と呼ばれる過酷な資金調達活動に動員され、「疑いをもつことは信仰の弱さ」とみなされる中で、主体的思考力を失っていく（同上）。このため祝福を受けた動機も「アベル（上位者）に言われたから」という受動的なものになりがちだった。この時点でGは教団組織の矛盾を十分に分析できていたように思われる。

「私が信じた教会とは違う」。しかし、だからといって、そこで立ち止まることはそれまでの

人生のすべてを否定することになる。入信する際に家族や友人やそれまでに獲得した社会的評価のすべてを「執着」として捨てている。その後の信仰生活のすべてを再び捨て去ったときに何が残るのか。生きていけるのか。Gは制約された条件の中でいかに生きるかを模索する道を選んだ。

#### 3-2 矛盾の総体

女性たちは理想の家族をつくるために格闘してきた。家族を「混沌たる矛盾を内包する発達共同体」と定義する布施晶子の視点に立つと、女性たちの営みに少し近づけるように思う。「家族は矛盾にみちた総体として存在し、その矛盾にみちた総体であって、つがいとしての夫婦、そして親子の間において、それがいかに歪曲化され矮小化される側面をもとうと、性と生の時間的共有をとおして、人間的な愛の交換を育んできた歴史的経過に目をむけるべきだ」（布施晶子『結婚と家族』岩波書店）。結婚生活は結婚のきっかけよりも、日々の生活の共同を通じて深められる人間的絆の方がより大きな意味をもつ。

女性たちの嫁姑問題には日韓の歴史問題もからむ。「うちの姑の世代は日本語は植民地支配を思い出させるものなので雰囲気として話さない方がいいかなあって感じもありました」（I）。「私が子どもと日本語で話していると、姑が寂しいって言うんですよ。日本語ができない姑は仲間外れにされたように感じるらしくって。それもそうだなって思ってだんだん日本語で話さなくなりました」（L）。抑圧・被抑圧の図式だけでは矛盾の総体としての家族は捉えきれない。

### 4. 多文化家族支援の制度化以前

韓国で結婚移住者が永住権を獲得できるようになったのは2002年である。永住資格を取得することによって就労許可も不要になった。2005年には永住者に対する地方参政権が付与され、同年、戸主制が廃止され結婚移住者は帰化せずに家族関係証明書によって身分関係を証明できるようになった。2007年に在韓外国人処遇基本法、そして2008年には多文化家族支援法が施行された。同法に基づき全国に配置された200カ所を超える多文化家族支援センターでは結婚移住者の

社会統合プログラムが実施されている。2010年には国籍法が改正され重国籍も容認された。劇的な展開である。

しかしこうした支援策が整うまでの間はどのような状況だったのだろうか。統一教会では新規来韓者に3泊4日のオリエンテーションを行っていたが、家庭出発をした後の支援は行っていない。この研修が2005年頃から33日間に拡充された。午前中は韓国語の学習にあてられ、午後は韓国文化、習慣、韓国の歌や楽器、料理、歴史を学ぶ。参加者の出身国は、日本、フィリピン、タイ、モンゴル、その他（ウズベキスタンなど）である。大半が日本人であるため、歴史の学習は日本人と他国出身者を分けて行っている。新規来韓者への対応が改善された背景には、初期適応に失敗した多くの女性たちの苦悩と挫折があり、そうした状況を変革するために教団に働きかけ続けた女性たちの存在がある。

「農村に日本人が大量に入っただけことは、いずれ、中国とか、ベトナムとか、フィリピンとかから入ったとしても、最初に日本人が入っただけことの意味があると思います。…外国人の嫁のイメージをプラスにする効果があったと思います。真面目だし、忍耐強いし、みんな信仰心を持っているから、親も大事にする。離婚しちゃいけない子どもをたくさん産まなくちゃって思っているから。教会の韓国社会への貢献は大きかったと思いますよ。……だからと言って、その人たちがみんなうまくやっているかどうかは分かりませんが、婦人会長になって、韓国の女性も含めた中でリーダーになっている日本人女性もいます。日本人だからそれができたって面があると思います。……韓国にとって日本は発展途上国ではないので、農村の嫁としていたとしてもバカにしない。何で大学を出てこんな田舎に来るんだって見る人もいるけど、やっぱり日本人とか日本って国を韓国人は無視できないから、認めるところがあるんです。一方でアジア出身者に対しては扱いが悪い。そういう人たちだけだったらどうだっただろうって思います」（ソウル調査2016でのGの発言。下線は筆者）。

Gは韓日祝福で来韓した日本人女性の教団内における位置づけを冷静に分析し、短期的な宣教手段として女性たちを利用したために、統一教会はより大きく発展できる可能性を失ったと考えている。

「日本の信者は金を搾り取れるという価値がある。しかし結婚して韓国に住んでいる日本人信者にはもはや利用価値はない。見捨てられたと言う者もいる。88年組は大卒がほとんど。日本人で大学まで出た女性が韓国人の所に嫁に来て、奉仕活動をしていることを韓国社会に見せることに意味があった。より大きな効果を得るには、彼女たちを経済的にも支援して、韓国人に羨まれるような祝福家庭を作ったことを見せるべきだった。その方が教会の発展につながったはず。そこが読み違い」（2016年12月3日の聞き取り）。

Fは1996年から2005年まで地方で暮らし、離婚して一旦日本に帰国した。再婚して2010年に再来韓した際の韓国社会の変化について次のように語っている。多文化家族支援法によって結婚移住者の状況が大きく改善されたことは確かだ。

「田舎とソウルの違いもあるのですが、状況が一変していて驚きました。多文化家族支援センターがあり、韓国語も教えてもらえる。家に指導員の人に来てくれたり、娘（再来韓時中学1年）の韓国語もみてもらえました。最初の時とは雲泥の差です」（2015年9月9日の聞き取り）。

## 5 入信動機から見てくる日本社会の揺らぎ

12名の調査協力者は、70年代後半に中学生になり、80年代半ばに高校を卒業した。女性たちの入信をめぐる語りに出てくるキーワードは「真実の愛」「理想の家庭」「世界平和」である。『原理講論』のなかの墮落論に当たる部分が女性たちの心に響いた様子が浮かび上がってくる。女性たちの「真実の愛」に対する期待水準と願望水準とのギャップから生じていた不安感に統一教会の宣教が滑り込む構図である。女性たちは心



の奥底に高い願望水準を維持し続けていた。

60年代の「学園闘争の時代」が過ぎ、70年代前半の「シラケの時代」から、サーフィンやディスコに興じる「ナンパ・コンパの時代」に移った。一方ではその波に乗れない若者たちがオタク文化を生み出す。80年代に入ると古いブームが始まり、「匿名メディア」（テレクラ・伝言ダイヤル・ネット出会い系）に少女たちが容易にアクセスできるようになった。

ソウル調査2016では、テレビドラマが話題にのぼった。不倫ドラマの火付け役となった「金曜日の妻たちへ」（1983年）から結婚規範の揺らぎが決定的となり、家庭が崩れていったこと、大人たちが自由を謳歌する足元で子どもたちが宙づりになってしまった時代状況が語られ共感しあった。

「日本では親は自由になっていた。そこが嫁いできたころの韓国との大きな違いでした。私の親たちが悪いこととしてたとは思わないけど、自分たちの趣味活動に走っていました。やりたいこと全部やっているみたい。うちは田舎だったので、夜に活動があるんですよ。今日は婦人会だとか、バレーボールだとか、合唱だとか、母親は夜はいないんです。父親は仕事でいないでしょ。うちはたまたま祖母がいて面倒を見てくれたけど、私たちは基本的に親が好きなことをやる姿を見て育っているんです」（ソウル調査2016でのGの発言。下線は筆者）。

70年代半ば以降に家族や地域社会が空洞化しはじめる中で、学校に対する依存度が極度に高まっていった。それは、「小中学生の塾通いの割合や、家計に占める教育費の割合が、急上昇」したことに反映されている。社会が学校化し、子どもたちを評価する基準が学業成績のみになり「学校で勉強ができない子どもは居場所を失うことになった」（宮台真司『中学生からの愛の授業』コアマガジン）。

居場所を求める人びとや生きづらさを感じる人びとに、居場所と承認を与えるものの一つがカルトだった。統一教会は女性たちが心の中に折り畳んでいた生きることの意味や疑問を受け止めてくれるような幻想を与えた。3人は入信

のきっかけを次のように語っている（下線は筆者）。

## 5-1 Gの場合

私の場合は大阪の大学に入ったんですけど、4月か5月に島根大学に入った高校の親友から手紙が届いたんです。統一教会に入って、再臨のメシアである文鮮明を信じているっていう長い手紙でした。私は小さい時から神様は信じていたけど、宗教は嫌いだったんです。これは宗教にはまっちゃったなって。彼女の両親に彼女が変な宗教に入ったみたいですよって電話したんです。ご両親はすぐに大学と連絡を取って、統一教会のことを良く知っている教授たちと彼女を大阪の反統一教会の教育をやっているところに連れて行って、確か1週間くらいで脱会したと思います。……だから、私は統一教会のことを知っていたし、雑誌で報道されていた悪いうさも知っていた。

その後、大学2年の終わりに、私を伝道した人に出会ったわけです。悪いと思っていたところに入ったわけですよ。3回目那人が来た時に、「でもあなたは統一教会のことを見たことないじゃないですか」って言われたんです。確かに私は実際に統一教会のことを見たことがない。悪いところだって噂を聞いている。本も読んでいる。だけど実際に見てないものを拒否するのはまずいよなって。「見てないんだから一回見に来たらいいじゃないですか」って。それもそうだなと。みんなに「行ったら洗脳されて大変なことになる」って止められました。でも行きました。それが出発点です。

どうして入信したかですが、Jさんと同じように、どちらかというと、世界平和だとか、そういうことかな。自分が社会に対して貢献したいという思いがあったんです。それと、男女の愛というのは信じられないという思いが小さなころからあったんです。それと、おそらく、自分は結婚しないし、結婚しても長続きはしない。すぐに離婚すると思っていた。小さいころ私は本をたくさん読んでいたんですね。漫画もたくさん読んでいました。幼稚園のころには字が読めたので、大人の漫画とかを読んでいたので情報多寡。子どもにはふさわしくないような情報をたくさん持っていたんです。世の中の汚いこ

とも知っていた。

統一教会に出会った時に、世界の平和が実現できるんじゃないかと。男女の愛、理想の夫婦、そこから生まれる理想の家庭、それが実現できると言っていたので、それができるとしたら、それをメシアという人が実現させる人だとしたら救いになると思った。それで入信することになったんです。

## 5-2 Jの場合

戦争のことに小学校の頃から関心があったんです。テレビを見て世界にはこんなところがあるんだって心にずしっときた。中学生の頃にはアフリカの難民に目を向けるプログラムもありました。中学3年の時に母が病気で亡くなったんですけど、私は平和に暮らせている。私に何かできることがあるんだろうかと、……お医者さんでもないし、看護師さんでもないし、報道関係でもない。私には何もないなあって。そんな時に教会に出会ったんです。

私は小学校1年か2年の時に宗教には入らないでおこうって決めてたんです。私は私の神様を信じていこうって。それなのに、なぜ、こういうことになったかっていうと、3日間、本当に悩んだんです。教理も聞いてひと通り説明も聞いて、セミナーに何回も出て、ついにこの道に行くか、行かないかを決めなければならない時に、私は結婚が決まっていた人がいたんです。入信したらその人と結婚できないじゃないですか。私も男女の愛は信じられないところがあったし、そこに全部を投入するって気はなかったんですが、流れで結婚ということになって。

本当にこの道を行くならば、自分のすべてを捨てていかなければならない状況で、どっちもできないんですかって聞いたら、できないって言われたんです。……それを言われてから3日間、私はあまり泣かないんですけど、泣きましたね。……私は文鮮明先生がメシアだとかいうのはあまりわからないんです。ただ私と神様との関係でこの道を選んできたので、韓国が好きとか、憧れの国でもないし、ここが信仰の祖国だから来たわけでもないし、文鮮明さんがメシアなんだっていうのも分からなかった。……それでも神様と私の関係で、神様が私に伝えてこられたことが感覚としてあるので教会に来まし

た。

## 5-3 Lの場合

1年くらい勉強して、じゃあってということで入会したんです。私が最初に通ってた教会は、西洋の人や、沖縄の人がいたんですけど、もともと自分が持っている宗教的背景があるみたいで自然だったんです。でも私は西洋的なところになじめなさがあったんです。違和感がずっとあったんです。豊の教会（統一教会）は、違和感が少なかったっていうかな。信仰が生活に密着している感じがしました。キリスト教の場合は再臨を待っているわけですが、それが雲から天からやってくると信じているわけです。でもそんなことありえないじゃないですか。現実性はないなあって、雲をつかむような信仰観だなあって思うようになったんです。

こちらは体系化されていて説得力があるんです。文先生がメシアだってことは最初は言われないんですけど、いろいろ体系立てて説明されると、そうとも言えるかなあって。今になると分かっている事柄、日本とか韓国には北のスパイがいるとか、北朝鮮の人が誘拐しているってことを聞いて、この平和な世の中でそんなことがあるのかって。でも後になって、本当に誘拐されていた人の事件が報道されるようになって、確信を持つようになったんです。でも入信を決意するときには、私の青春はどうなるんだろうって思ったりしました。まだ19か20でしたから。でもこのまま生きていっても、納得できる人生を生きられるかっていうと自信もない。それなら真実だと言われる道を生きるのもいいかなって。……本当に価値ある人生を生きることができないという不安があったと思います。でも私は10代でなかったら来られなかったと思います。現実的だから。10代でなければ、他にやりたいことを見つけていたと思います。

## 6. IMF危機

1997年夏、タイから始まったアジア通貨危機は、12月にウォンの暴落という形で韓国を朝鮮戦争以来の危機に陥れた。デフォルト寸前まで追い詰められた韓国はIMF（国際通貨基金）の支援を受けてどうにかこの危機を乗り越えた。

女性たちは当時の様子を次のように語っている。

「男性が失業して仕事がなくなってバタバタと倒れていった。リストラ。結果として女性も働かざるを得なくなった」(G)。「外資がどーっと入ってきたんです。それまでは土曜勤務もあったんですが、週5日制に切り替わったり、年功序列が完全に崩れて年取制になって、生涯雇用が崩れて……」(I)、混乱は女性たちの家族も直撃した。

Iの夫は給料が3割も出ない状態がしばらく続いた。Gの夫の給料も止まった。Jの夫は会社に見切りをつけて友人と事業を始めたが2年ほど収入のない状態が続いた。預金も底をつき途方にくれたJは日本の父に援助を求めた。Jは入信するときに結納まで済ませた結婚を取りやめている。父親とはかなりの葛藤があったはずだが、時間が経過する中で経済援助を依頼できるまでに関係が修復していたことになる。Jの夫をねぎらう言葉も印象的だ。共に家族をつくってきた時間の中で育まれた思いやりが伝わってくる。

「日本の父にいま韓国は大変でって言うしかないですね。夫なんて魔法の財布があるような気になっていて。そんなでしたけど、本人は本人なりに苦労していたと思います。本当に大変でした。妹にも顔が上がらないですね。『お姉ちゃん、お父さんにお金借りてたよね』とか言われて。バレバレなんです」。

Lの夫は結婚した時から無職で家計を支えてきたのはLである。IMF危機をLとGは日本人信者向けの本を自費出版して凌いだ。研修に参加している日本人信者が韓国語で行なわれる講義を理解できずにいる様子に気づいた2人が、「日本語版があったらいいよね」と思いついたプロジェクトだった。受講ノートを整理し、配布された韓国語の資料をGが日本語に訳した。「一人目の妊娠中で、お腹が大きかったし、他にできることがなかったんですよ」と言うが、170頁と220頁にものぼる大作である。Gが日本から持参したワープロが役立った。

女性たちに家計管理について尋ねると、夫から生活費を受け取っていたのはJのみ。Gは「結婚した時から別財布」で、Gの分担は子どもの教育費である。自営業に転身した夫の収入が減って

からは食費も分担している。Iは「私のものは私のもの。夫のものも私のもの」と笑わせながら、常勤で働いていた時は別々に収入を管理し、必要経費を分担していたと言う。Lは結婚以来ずっと稼ぎ主である。4人の女性たちの場合は、IMF危機が家族の結束を強める方向に働いた。GとLは生活防衛のための共同プロジェクトを通じて信頼関係を強め、Jの場合は、一旦、距離をおいた日本の家族との関係を結び直すきっかけになった。

## 7. まとめ

本稿で取り上げた女性たちを韓日祝福で来韓した日本人女性として一般化できるとは思っていない。しかしこのように、自覚的に自らの置かれた状況を判断し、主体的に人生を切り開いている女性たちがいることもまた事実である。彼女たちの自己変革を促した2つの外的要因もあった。ひとつは来韓したことによって、エンドレスな経済活動から解放され、自省する時間的余裕を得ることができたこと。もうひとつはインターネットの普及により、教団の情報コントロールが効かなくなったことである。

教義の問題に立ち入ることはできないが、女性たちの語りからは、入信時の愛や平和を求める純真な思いが実生活の中で鍛えられ、主体的な行為者として自己変革を遂げてきたことが分かる。統一教会は2012年に教祖・文鮮明が亡くなり組織的には過渡期にあるが、そのことと7000人もの女性たちの人生は別の問題としてある。新たに韓日祝福で来韓する女性たちの流れも続いている。脱会して問題が終わるわけではない。信仰を維持している女性たちはよいとしても、信仰の揺らいだ女性たちは残りの人生をどう生きていくのか。「神の子」として生きることが運命づけられた子どもたちをどう支えるのか。課題は山積している。

Gはさまざまな工夫をこらしながら、女性たちに必要な情報を提供し、相談に応じている。「日本人女性の苦悩を知っているのに、何もアクションを取らずにいるとしたら、私自身が後悔することになる。自分はそういう一人として終わりたいくない」。Gが苦悩の末にたどりついたのは、一面では日韓の歴史問題や日本の社会状況が生み出したともいえる在韓日本人女性たちと

共に生きることに新たな意味づけを行なうことだった。その射程に子どもたちを含めることによって、能動的実践は世代をつなぐものになりつつある。Gと思いを共有する女性たちも相当数いる。自分ひとりの執着から離れることによって、人はより強く、普遍的価値の実現に向けた流れのなかに自らを位置づけることができるようになる。日韓の歴史問題の克服も、こうした女性たちとの対話を通すと新たな可能性が開いてくるのではないだろうか。

注：「オーソドックスなキリスト教は、人間の原罪を神の一子イエスが十字架で贖罪し、イエスを信じることで救済が得られると説く。しかし、統一教会では、原罪はサタンと人類始祖のエバが姦淫・不倫をおかし、神に背いた悪の血統がアダムを経て人類全てに相続されていると考える（墮落論）。イエスは子孫を残さずに天に上げられたので神の救済計画（復帰摂理）は失敗したが、神は人類に再臨主を遣わし、神の王国建設は現在も続くのだという。その再臨主が文鮮明であり、文夫妻の司式による「祝福」（合同結婚式）によって無原罪の子をなし、神を中心とする家族を完成させるというのが統一教会の活動目標である」（櫻井・中西2010）。

アダムとエバの関係は日韓の関係にも適用され、韓国をアダム、日本をエバと規定することによって、日本が韓国に貢献するのは当然とされる。

【付記】本調査は、平成26年～28年度科学研究費助成事業、基盤研究C、研究課題番号26380725「結婚移住と家族形成に関する日本と韓国の比較研究」（研究代表者：武田里子）の成果の一部である。